村山市上五十沢集落の風景とその保全継承に関する研究

A Study on the Landscape, its Conservation and Succession of Kami-Isazawa Village in Murayama City

温井 亨*

Tohru NUKUI

摘要：本研究の目的は、集落、農地、山林が一体となって形づくられ、生活や生業の介在によって維持されてきた里の風景を保全継承するための方法を探ることである。そのために事例研究として山形県村山市上五十沢集落¹⁾を取り上げ、戦後の変遷を空間・形態、生活・生業の両面から分析した。その結果、後継者の不在により建て替え需要が抑制されたこと、土間や下屋を利用した増改築による時代への対応が外観を守ったこと、村を出た子供連家族の住まいが1時間圏内に多いこと、農地の保全のために売買・賃借など時代に合わせた工夫が図られたこと、隣人との間に境を設けない空間構造・所有権意識が離村を目立たなくしていること、小規模な公共工事をしばしば村民自身が設計施工していること、等の相互連関が風景を保全したことを見出した。

1. はじめに

本研究の目的は、集落、農地、山林が一体となって形づくられ、生活や生業の介在によって維持されてきた里の風景を保全継承するための方法を探ることである。そのために事例研究として山形県村山市上五十沢集落¹⁾を取り上げ、戦後の変遷を、空間・形態、生活・生業の両面から分析した。

事例として取り上げる同集落は、過疎と高齢化という課題を抱えつつも、今なお8割以上の世帯が茅葺きの家屋を維持しているが、これだけ茅葺き家屋のまゝ残っている集落は現在ではきわめて少ない。そこで村山市は1995年度より、同集落の風景を保全する事業に着手しているが、そこでは民家園のような空間・形態だけの保存ではなく、生活や生業と共にある、農村のたたずまいの全体を保全継承することを考えている²⁾³⁾。

本研究では具体的な分析項目として、1.世帯・職業の変遷と離村、2.水田の変遷、3.住まいと生活の変化、4.集落居住区域の空間構造、5.住民・出身者の意識、の5項目の分析を行ったが、そこで意図するのは、同集落の風景を空間・形態、生活・生業の両面に渡る諸要素の相互連関によって成立しているものと捉えることであり、その相互連関システムの一端を、戦後の変遷を通して明らかにすることである。

そのための調査手法としては、ヒアリング調査、間取りを含めた現況調査、アンケート調査、地籍図・航空写真の利用を用いた。

なお、筆者は同事業の調査と施策の展開に参加している²⁾³⁾。

2. 上五十沢集落の概要

上五十沢集落は図-1のように山形県内陸部に位置し、内陸性気候であり、夏には最高気温が30℃を越えることもあるが、冬には最低気温が-10℃前後まで下がる。また豪雪地帯であり、積雪は2mにも達する⁴⁾⁵⁾。地形的には最上川の支流、五十沢川の奥まった谷あいであり、山に囲まれている。したがって、同集落に於ける風景は、眺めの対象が周囲の尾根筋までの狭い範囲に収まり、風景の保全継承には有利な地形である。

交通的には、図-3のように国道13号から分岐する県道の末端に位置する。県道

は上り下りもなく、概ね平坦であり、上五十沢集落まで車で5分ほどの行程である。山形市へは国道13号を使い車で約1時間であり、平行してJR奥羽線も通じている。また、近隣の商業施設としては、車で10分くらいの所に大手スーパー・マーケットが数軒ある。一方、上五十沢集落の特徴として、集落へ通じる道が尾花沢市を介してのものしかなく、直接市内他地域と結ぶ公共交通機関がない。したがって、車を運転できない高齢者等にとっては、市役所等の公共施設利用に不便がある。

現在、人口48人、平均年齢64才、一人住まいの老人世帯が3戸ある。世帯数は21世帯であり、図-2のように茅葺きの家屋が多数残っている。3軒の空家（うち1軒は村づくり拠点施設として活用）を加えた24戸のうち、21戸が茅葺きの建築であるから、 $21/24=87.5\%$ が茅屋根の建築を持っているとも言える。ただし、全てが住まいとしているわけではなく、かつての住まいをコヤ⁶⁾として使っている家もある。また、集落内には他に、トタン葺きのコヤ、神社、公民館、車庫等もあり、実際に集落内で目に映る茅葺きの比率はそれほどは高くない。

次に生活上の問題点を何点か挙げる。住民にとっての負担としてまず挙げられるのは茅屋根の維持である。維持の方法は、山形県内陸部では差し茅が行われる。これは毎年屋根の1/4くらいに茅を差しして補修する維持方法で、1/4なら4年で一周する訳である。現在、上五十沢集落ではほとんど全ての屋根が美しく保たれているが、そのためには、秋に茅刈りを自ら行い、また職人に手間代として毎年10万円以上払う必要がある。

また、茅屋根と並んで大きな負担となっているものに雪下ろし

図-2 集落居住区域の概要

図-1 山形県内上五十沢集落の位置

*東北芸術工科大学デザイン工学部環境デザイン学科

がある。一冬に3～5回も必要となるこの作業は、特に高齢者にとって危険であり大きな負担である。

その他では、便所の水洗化（合併浄化槽）が望まれているが、現在のところ設置した家はない。そして、こうした個々の問題の上に、高齢化と後継者の不在（十数年後には殆どの住民がいなくなる可能性）というさらに深刻な問題がある。

3. 世帯・職業の変遷と離村

上五十沢の風景に最も影響を与えたのは、戦後の我が国の経済構造の変化であり、その結果としての住民の生業の変化である。そしてそれは離村に結びついた。

区長、副区長へのヒアリングにより、それを図-4「戦後の世帯・職業の変遷と離村」としてまとめる。ヒアリングによれば、世帯数が最も多かったのは戦後の39世帯である。図では39世帯のそれぞれについて、その後の変遷を記す。

39世帯という状況は1960年代初めまで続くが、それを支えたのは炭焼きと養蚕である。上五十沢は谷あいでは平地が少なく、水田で食べて行ける家は少数であり、その他の家では炭焼きと養蚕に頼った。

1960年代から世帯数が減り出し、1970年代をピークとして1985年頃までに15世帯が離村しているが、その後の離村は現在まで3世帯のみである。これを経済の時代変化から説明すれば、1950年代後半の炭の需要減少、1970年から本格的に始まったの米の減反開始、同じく1970年代に入ってから養蚕の衰退が影響していると考えられる。図-4に示す通り、1990年以前の離村者を見ると、ほとんど（15戸中13戸）が米以外を主たる収入としている。残る2戸も5、6反程度の水田所有である。ヒアリングによれば、離村のピークとなっている1970年代は、水田の土地価格が下落する直前であり、水田を売った金で新居を建てるなどの資金とできた。これが1990年代に入ると傾向が変わる。離村した3戸のうち2戸は村内でも水田面積の大きな家である。また、他の1戸はおばあさんの一人暮らしとなり息子宅に引き取られた家である。今後はこのような、老いて子に引き取られる離村、あるいは五十沢で最期を迎える一人暮らしというパターンの増加が予想される。離村者の転居先は図-3のように東根市が多い。東根は山形への通勤を対象とした宅地分譲地の北縁であり、積雪も五十沢の半分以下である⁴⁾⁵⁾。

図-4では地元でのヒアリングから推測される離村の直接の動機も記したが、それによると「嫁を迎えるため転居」という理由が多い。この場合、親と息子は同居し2世帯住宅を形成する。一方、在村している世帯は、21世帯中親子の同居している世帯が9世帯と約半数あるが、子供が結婚して2世帯住宅となっている家（親子とも60歳以上の2世帯住宅は除く）は3世帯しかない。

さて、在村世帯のうち、60才未満で農業に関わる家は僅かに3軒（52才、50才、49才）である。この3軒は、1970年代の離村が多かった時代に、息子が村に留まり農業を継いだ家を意味する。逆に言うとその家では、同居別居の違いなく、息子が農業を継がずに村の外へ出た。息子と同居すれば離村を意味し、逆に村に残れば親子別居となった。

ヒアリングによれば、村に残った家では炭焼きの衰退する1960年頃から出稼ぎが多くなり、1970

世帯番号	世帯構成	現在の居住地	離村年			離村理由	現在の職業	かつての主たる収入
			1960	1980	2000			
1	同居	埼玉県	.	.	●	老いて子に引き取られる。	非農	炭、蚕
2	別居	在村（大崎市）	.	.	.	.	農	木挽、蚕
3	同居	山形市	.	●	.	母つれて転入、相手の家の農業継ぐ。	農	炭、蚕
4	同居	東根市	.	●	.	嫁を迎えるため転居。	非農	炭、蚕、(米)
5	同居	東根市	.	●	.	嫁を迎えるため転居。	非農	米、蚕
6	同居	在村	.	.	.	.	農	米、蚕、炭
7	同居	東根市	.	●	.	嫁を迎えるため転居。	非農	炭、炭、(米)
8	別居	在村（東京都）	.	.	.	.	農	米、蚕、炭
9	同居	在村	.	.	.	.	農	炭、炭、(米)
10	別居	(尾花沢市)	.	.	●	亡くなって無人に。	非農	.
11	同居	東根市	.	●	.	通勤の利便性。	農	炭、琴製作
12	別居	在村（東根市）	.	.	.	.	農	米、蚕
13	同居	在村	.	.	.	.	農	炭、炭、(米)
14	同居	在村	.	.	.	.	農	米、蚕
15	同居	東根市	.	.	●	嫁を迎えるため転居。	非農	炭、蚕
16	別居	東根市？	.	●	.	残された妻の自活のための転居。	非農	大工、店
17	同居	在村	.	.	.	.	農	炭、蚕、(米)
18	同居	福島県	.	.	●	子供に呼ばれて。	農	米、炭、蚕
19	別居	在村（福島県）	.	.	.	.	農	米、杉
20	.	神奈川県	.	●	.	残された妻の自活のための転居。	非農	.
21	.	在村	.	.	.	.	農	米、蚕
22	同居	東根市	.	.	●	嫁を迎えるため転居。	農	茅葺職
23	同居	東根市	.	.	●	通勤の利便性、嫁を迎えるため転居。	非農	.
24	別居	在村（尾花沢市）	.	.	●	出稼ぎ	非農	蚕
25	別居	在村（市内農園）	.	.	.	.	農	米、蚕
26	同居	在村	.	.	.	.	農	米、蚕、炭
27	別居	在村（東根市）	.	.	.	.	農	米、蚕、炭
28	同居	在村（仙台市）	.	.	.	.	農	炭、蚕、炭
29	同居	市内中沢	.	●	.	.	非農	炭
30	別居	在村（市内生田）	.	.	.	老いて子に引き取られる。	大工	.
31	同居	東根市	.	●	.	転居して嫁を迎えた。	非農	炭
32	同居	在村	.	.	.	.	農	米、蚕、炭
33	同居	在村（市内新田）	.	.	.	.	農	炭、蚕
34	同居	市内たも山	.	.	●	通勤の利便性から、母といっしょに。	非農	炭
35	.	埼玉県	.	.	●	大工稼いだ地に落ちついた。	農	炭、大工
36	同居	在村	.	.	.	.	農	米、蚕、炭
37	同居	在村	.	.	.	.	農	木挽、米、蚕
38	別居	在村（山形市）	.	.	.	.	農	炭、蚕
39	同居	寒河江市	.	.	●	子供に呼ばれて。	農	米、蚕

注）・世帯構成は親子の同居、別居を記述。同居のうち下線付きは、在村世帯で子供が結婚して2世帯住宅となっているもの（子世帯を60歳未満とし、親子とも60歳以上の2世帯住宅は除く）。離村世帯は離村時の世帯の様子、在村世帯は現在の世帯の様子を基準に分類。
・現在の居住地で（ ）内は、別居している子供の居住地（上五十沢に最も近い所を代表）。
・現在の職業は、農業に関わっていれば農、いなければ非農。下線付きは60歳未満で農業に関わっている世帯。
・かつての主たる収入は、1960年頃までの収入源。

図-4 戦後の世帯・職業の変遷と離村

年代後半まで続いた。その後は山形市辺りまでの近傍で、通年で仕事（建設業、製造業等）が見つかるようになったという。山形市から村山にかけての地域は、1970年代に道路建設、工業団地の造成などが進み、産業立地と建設需要の発生したことが原因であると考えられる。現在、60才代前半まではこうした仕事との兼業で農業を行い、それ以降は農業と年金で暮らす例が多い。

道路については、その利便性の向上（国道13号のバイパス化と4車線化）が、離村・在村の決定に影響を与えたことも想像されるが、ヒアリングでは否定的な回答であった。国道13号の近傍に位置し、それ以前から道路条件の良かったことが理由だと考えられる。

また、図-4から分かるように、老人だけの世帯でも、1時間以内で行ける近隣に子供達の暮らししている場合が多い。上五十沢で一人暮らしを含む高齢者世帯が可能なのは、その為と思われる。

4. 水田の変遷

上五十沢集落の場合、農地は概ね良く耕作され、美しい風景が維持されている。しかしながら、同集落では離村した世帯も多く、また高齢のため既に耕せない世帯もある。ここでは明治21年に作成され、その後の土地売買の修正を加えた地籍図と、平成2年に撮影された航空写真より判読した畦畔から図-5を作成し、上五十沢集落の水田が戦後どのように変遷してきたかを検討する。

図-5の実線で囲われた区画が水田である。凡例に示す通り、耕作者の交代が無く現在も耕されているものは白抜きで、それ以外の耕作放棄、売買、貸借等変遷のあった水田は、色塗り、A～Dの記号、説明の書き込みで示す。

図-3 離村後の居住先

図のように、水田は北から南に延びる谷に沿って広がる。国道から集落に通じる県道も谷に沿い、集落内を除けば、上五十沢の風景の主要な視点はこの県道にあると言える。図の通り、県道沿いの視点から見える水田には、ほとんど休耕田はない。一方、この谷に流れ込む小さな沢筋の水田は耕作放棄されているが、県道沿いの視点からは見えない。

集落を越えると道は狭くなり、さらに南下すると三つに分かれる。両側は谷の道で水田が続き、中央は尾根に昇って茅場に至る。ここでも二つの谷に流れ込む沢筋の水田は休耕田であり、また、二つの谷の水田自体も上流部は耕作放棄されている。集落のすぐ南側で道路近くに割合大きな休耕田があるが、道路上の目線より高い位置であるため目立たない。また、集落近くでは、ほとんどの水田が砂防工事、林道工事のために買収された沢もある。

図から売買、貸借された水田が全体の半分近くのにぼることが分かる。このうち売買は8件（工事買収除く）であり、7件が1980年以前、1件が1980年代前半の取り引きである。また、これらは全て集落の北側に位置する日照条件の良い水田である。買い手は、集落の入口近くでは、隣の中五十沢集落住民の場合が1例あるが、後は同じ集落内の3軒となっている。このうち1軒は自分の水田の隣りを買収しているが、他の2軒はもっと積極的に広く買っている。ただし、そのうち1軒は後に自らも離村している（売買→C）。水田を売って離村する世帯がある一方で、村に残る事を決意し、水田の拡大を図った世帯もあった事が分かる。ただし、このような選択が行われたのも1970年代後半までである。

貸借には4種類ある。ひとつは主要な作業を近在の村（中五十沢集落とさらに下の横内集落）の人に頼んでいる世帯である。こ

れは1軒だけであるが、ご主人が亡くなった後も、女手だけでこうして水田を維持している。

次に高齢化して耕せなくなったために、耕してもらっている世帯が2軒ある。1軒は集落内の別の家に頼んでいる家で80才代の夫婦2人暮らしの世帯であり、現在畑だけやっている。もう1軒は1人暮らしのおばあさんだけの世帯であり、東根に住む子供夫婦（と言っても年齢は70才間近）が通って耕作している。

3つ目に離村者が貸している水田がある。1990年代に入ってから離村した家では、売ることができずに貸すという形となった。また最後に、離村者が地主に水田を返していった場合がある。

以上の貸借は、米で貸借料を払っていると思われるが、貸借料は低く、農地の維持が優先していると考えられる。特に3つ目の場合では、荒らさないで維持してもらえればということで貸借料は気持ち程度の場合もあることを、ヒアリングで確認した。

5. 住まいと生活の変化

図-6に戦後の住まいの変化を示し、風景への影響を分析する。主に平面図によったが、変化の特徴によっては立面図、あるいは文章で説明した。変化のタイプを示すことを主眼としたので縮尺の統一は図っていない。三角で入口を示す。

上五十沢集落の住まいの原型は、東北の民家平面の祖型のうち最も広く分布する広間型三間取りの平面を持っている。上五十沢では、ザシキあるいはナカマと呼ばれる囲炉裏のある板敷きの部屋が広間にあたり、奥に畳敷きのナンドとデイがある。1～38のなかには、デイを挟んだ表側にもナンドと同様の小部屋の設けられている例が多いが、これはこの地域の特徴である²⁾。ニワは土間であり農作業に使われ、古い家ほど広い傾向がある。また、多雪寒冷地のため、刈り取り後脱穀までの収納場としてのイナベヤと、マヤと呼ばれる馬屋が家屋内に取り込まれている。こうした住まいでは、広間と土間の境に間仕切りがなく、またナンドとデイを除き天井も張られていないので、囲炉裏で発生する熱は上に横に逃げ、たいへん寒かったことが想像される。

ヒアリングによれば、戦争直後にはまだこのような様子であったと言うが、その後住まいは変化している。現在、囲炉裏を使っている家は1軒だけであり、ほとんどの家では、かつて囲炉裏のあった部屋に天井を張り、また、全ての家で土間境には建具を入れている。

今回の調査では、現存する24棟の住まいのうち21棟の平面を調査した。その結果から、住まいの変化を次の9つに類型化して考察する。①ほとんど変わらないもの（17, 21, 38）、②土間まわりを改築して玄関・茶の間・水まわり・個室等としたもの（6, 8, 12, 13, 14, 28, 32）、③下屋⁷⁾（庇屋根）を出して増築したもの（1, 6, 12, 14, 25, 27, 32, 38）、④コヤを新たに増築したもの（2, 14）、⑤蔵座敷を取り壊し新しい住宅に建て直したもの（19）、⑥半分を取り壊し2階建てにしたもの（36, 37）、⑦トタン屋根に直したもの（12）、⑧新築したが元の家屋をコヤとして維持しているもの（26, 33）、⑨増改築し外観を一新したもの（9, 30）。

まず、①はほとんど外観の変化のないもので、特に21の場合外観は変化がない。内部で変化したのは、コヤとイナベヤの床を土間に変えたこと（トラクター等収納のため）、マヤを便所としたこと（内便所化）、ニワの面積を半分にしたこと、ニワの隅にあった風呂桶を壁で囲って独立した浴室としたこと、ナカマを間仕切って3つの部屋と縁側に分割したこと等である。ニワの奥に流しがあり、床置き型から立って使う型に変化しているが、温度環境の方は昔のままである。天井がないこと、かつてのニワ、マヤ、イナベヤと、現在でも間仕切りなしに一体であることにより非常に寒い。

図-5 戦後の水田の変遷

図-6 戦後の住まいの変遷と9つの類型

②は、流し場の寒さの改善と、機械化やコヤの充実によって不要となったニワの活用を兼ねて、土間まわり (ニワ、マヤ、イナベヤ) を改築したタイプである。改築のやり方としては、流し場に壁と天井を設けて独立した台所とすること、土間を縮小して玄関とすること、台所と玄関の間に茶の間を設けること、イナベヤ、マヤを浴室や子供部屋に直すこと等である。

③は下屋を出して増築したタイプであり2種類ある。ひとつは増築した下屋と既存部分を併せて部屋をつくる方法である (6, 25, 27, 32)。この方法と、②の台所改築を併せて行い、広々としたDKを実現している例もある (12)。もうひとつは、一間以上下屋を出して新たに部屋を作るやり方である (1, 17)。

④の場合、コヤ部分はトタン葺きになる。③の下屋も、昭和初期まではコバ葺きが多かったが、その後はトタン葺きである。

⑥の場合は2階に個室群を設けている。現代的な考え方であり、プライバシーの面で優れるという利点がある。

さて、以上の住まいの変化が風景に与える影響を、筆者は以下のように考える。①②は外観の変化がないので影響がない。③④

は茅屋根の部分が保存され、周囲にトタン屋根が低く付け足された形であるので、影響は少ない。⑤⑥は少なからず影響はあるが、茅葺きの部分が残っていると言うことはできる。⑦は素材が変わったが外形は変化ない。また⑧の2世帯は、住まいは変わったが、コヤとして元の茅葺きの家を維持している。

上五十沢集落の場合、風景への影響の少ない①～④による変化が13/21=62%、茅屋根を残した⑤⑥まで入れると76%、⑧まで含めると90%となり、その結果風景が保全されたことが分かる。

6. 集落居住区域の空間構造

上五十沢集落の風景が保全されている理由の1つに、集落居住区域の空間構造を挙げることができる。図-5にあるように、居住区域は集落の領域のほぼ中央に立地し集村の形態を成す。また、その全体の概要は図-2の通りである。南北に五十沢川と県道が縦断しているが、家屋の配置は両者から引きをとって立地する例が多く、特に居住区域南北には台地状の拡がりがあり、そこでは家屋が面的に拡がっている。

図-7はそのうち北側の居住区域を拡大して描いたものである。その空間構造の特徴は、建築の方位や道の形状の不規則なことであるが、さらに各屋敷の敷地境界が不明瞭であるという点が挙げられる。図には7世帯の屋敷が描かれているが、主屋のほかにはコヤと呼ばれている付属屋、車庫、かつての蚕室で軽量鉄骨の骨組みだけになっている構造物 (作業場や車庫、物干しとして使用) などがある。しかしながら、それらがどの世帯に属するかは見分けられない。

一般に、敷地境界に塀、生け垣、石垣、水路、あるいは付属屋等が配されている場合には、もしその家が空家となると、はっきりと歯が抜けたように空家の存在が明らかとなる。ところが、五十沢集落の場合には、敷地境界が不明瞭であることと、離村者が出ても、家屋が荒れて行く状態をさすのは見苦しい (茅屋根、豪雪のため荒れやすい) と取り壊すので、離村後は痕跡が残らない。また、コヤだけ残して行く場合もあるが、もともと付属屋がどこの世帯に属するのかわからないという空間構造であるため、離村による違和感は生じない。上五十沢集落の空間構造のこうした特徴は、これまで同集落の風景が保全されてきた理由の一つに数えて良いと思われる。

図-8は、図-7と同じ範囲に土地所有の境界を描き入れ、同時に戦後離村した世帯の家屋も描き込んだ図である。現地に於いて、あるいは図7だけを見て、このような敷地境界を想像するのは至難であろう。両図を見比べると、かつての家屋の跡が畑になっている例を見つけることができる。この場合、賃借料のようなやり取りはない。このようなことが可能であるのは、土地所有に関する個人の権利意識が前面に出ないためであると考えられるが、それは風景に於ける敷地境界の不明瞭さという特徴が、単に物理的な問題に留まるのではなく、住民の意識の現れであることも示唆している。

以上のような空間構造の特徴は、集落内の簡単な公共工事を、しばしば住民自身が共同で施工していることにも認めることができる。そこには、共同体という関係性が今なお維持されているという特徴があり、それが空間の特徴にも繋がっている。図-2に工事箇所を記すが、その内容は、道路拡幅、水路工事、畑との見切りの土止め、橋工事等である。ほとんどの場合、材料は自治体が用意している。写真-1は、その方法による道路拡幅の例である。住民といっても土木工事のベテランば

写真-1 住民の設計施工による道路工事

図-7 集落居住区域の特徴（現状図）

かりであるので可能なのだが、普段生活し熟知している家の前を工事するので、風景への配慮が行き届いた魅力的な仕上がりになっている。杉の巨木を残し、間知ブロック積みの擁壁を低く抑え、斜面の植物が翌年茂れば、擁壁から路上にも掛かるように設計されている。このような住民自身による土木工事はかつては当たり前のものであり、伝統的な集落風景のつくられ方であった。そして、こうした方法が今なお行われていることが、上五十沢集落の風景が保全されている理由の一つだと考えられる。

最後に、以上の空間構造の特徴を植木や花の植え方にも確認する。一般に植木や花は家屋とセットになった庭に植えられ、それが敷地ごとの分節となり集落や街区が構成される。しかし、上五十沢集落の場合には、図-7のように道に対して、あるいは道から玄関までのアプローチに植えられるので、逆に個々の敷地という在り方が打ち消されている。図を見ると、それ以外の場所には植栽されていない例が多いが、これは農家建築の伝統的な特徴のためである。上層農家を別として、もともと農家のつくりは外に対して閉鎖的であり、庭を鑑賞するための座敷を持っていない。上五十沢集落に於いても、一軒（世帯番号19）を除き同様である。

図-9 アンケートによる住民の意識

図-8 集落居住区域と土地所有境界（離村した世帯の家屋も記入）

7. 住民、出身者の意識

図-9、図-10にアンケートによる住民と上五十沢出身者の意識調査の結果の一部をまとめる。図-9の「住民に対するアンケート」は、景観活用整備調査が始まってすぐ、1996年秋に行った。地区懇談会で用紙を配布、地区長を通して回収、各世帯男女1名の回答をお願いした。回答率は男18/18、女19/21である。一方、図-10の「出身者に対するアンケート」は翌年秋、同調査報告書とともに用紙を郵送して協力をお願いした。送付先は住民からの申告による希望送付先であるので、出身者全員ではなく、村づくりへの関心の高い人達に偏っていると想像される。送付44に対し、回収（郵送）29である。分析は地域別（県内12名、首都圏10名、その他7名）と、年齢別（20～30代7名、40～50代10名、60～70代11名、（年齢不明1名））で行った。なお、20～30代は首都圏が多く、40～50代では県内が多いという関係がある。

まず、①「風景をどう思うか」では、住民、出身者ともに「普通の風景」を選択している人が最も多く約半数であるが、「恥ずかしい」を選択した人は、住民に38%いるのに対し、出身者では14%しかいない。「誇り・美しい風景」という答えは、住民では8%、特に男性はゼロであるのに対し、出身者では34%、特に

図-10 アンケートによる上五十沢出身者の意識

図-11 風景保全要因の相互連関

県外で47%，20～30代では71%の高率になっている。

②「将来の上五十沢は？」という問いに対しては、「住む人がなくなる」という予想が共通して最も多いが、住民が57%であるのに対し、出身者は72%，なかでも首都圏では90%となっている。グリーン・ツーリズムを含め観光化の予想は少ないが、住民と県内出身者に「別荘」という予測をした人がある。

③「住宅についての問題点」は住民だけに訊いているが、除雪と便所の水洗化、冬の寒さなどの選択が多い。ここでの設問には含んでいないが、毎年10万円以上かかる茅屋根の維持は当然問題点である。

④「暮らしについて」も住民だけに質問している。「満足」「不満、改善望む」が住民全体の3割弱で拮抗しているが、さらに多いのは「不満だがこのままで良い」の35%である。一方、81%が「今後とも住み続けたい」を選んでいる。

⑤「観光化をどう思うか」も住民への質問であるが、「期待する」と「住みづらくなる」が半々であることが分かる。男のほうに「住みづらくなる」という警戒が強い。

⑥「どれくらい訪れるか？」は出身者に対する質問であるが、「全く行かない」はゼロ、「年に数回以上」が全体の55%あり、出身者が頻繁に五十沢を訪れていることが分かる。

⑦「家を相続したら」も出身者への質問であり、「壊す」という答えの他に、「貸してもよい」という答えが20～50才代にある。この中には「公的機関なら貸しても良い」という答えが14%（4名）ある。「別荘として使いたい」という答えも4名からあるが、そのうち3名が県内であり、40～50才代である。

⑧「将来戻る気があるか」という出身者への問いに対しては、「全くない」が最も多く全体の41%、「定年後戻りたい」7%、「別荘として使いたい」17%となっている。

8. 結論

図-11に、上五十沢集落が今日まで保全されてきた諸要素の相互連関をまとめる。経済の構造変化の中で、後継者となるべき子供達が集落から出ていったのは大きな問題であった。しかしな

がら、上五十沢集落で伝統的民家が残ったのは、逆にその結果であった。調査結果より、家屋の建て替えは嫁取りに際して行われることが多いと分かるからである。また、村に残った親の世帯が、下屋による増築、土間の改造という方法で時代変化に対応したことも外観を守った。しかしながら、風景が保全されてきたのはその他に、1時間以内の近傍に村を出た子供達家族の住まいがあるようになり、兼業農家としてやって行けるようになったこと、売買や貸借など時代に合わせたやり方で農地の保全継承が図られてきたこと、隣人との間に敷地境界を設けない空間構造や、個人の所有権に強く拘らない住民意識、また、簡単な公共工事を住民自身が施工するという伝統的な村の風景づくりが維持されていること、などの諸要素の複合的連関の結果である。逆に風景は保全されてきたものの、消極的理由で残ってきたことを象徴しているのは、台所が外気温と変わらないくらい寒い家屋が残っていること、便所の水洗化工事を行った家がないことなどに現れている。

次に集落の将来について考える。後継者がいない限り集落は消滅し、民家園型の保存はともかく、本研究が目指す生活・生業と共にある里の風景の保全は不可能となる。しかしながら、アンケート結果の中には、本研究の方向とも一致する、里の風景を見直す視点を含んだ回答も見い出せる。①「風景をどう思うか」で、誇りであるという答えが県外の若者に多いこと。②「将来の五十沢は？」⑦「家を相続したら」で、県内の40～50才代に「別荘として使いたい」という答えがあること等である。また昨年より、上五十沢出身者で、東根市より通いで炭焼きを始めた人がある。定年後の趣味に近い炭焼きである。

今後は里の保全と言っても、これまでのような維持の仕方は不可能である。また、本研究で明らかにしたとおり、上五十沢の風景が戦後現在まで保全されてきたのは、すでに諸要因の微妙な均衡の結果である。今後は、アンケート結果にもある里の風景見直しの新しい傾向を大事にしつつ、また様々な諸要因に目を配り、同時に、集落・農地・山林の全体が維持されるような新たな生活と生業の在り方を探すことが求められている。

注と参考文献

- 1) 現在、五十沢を名のる集落は上五十沢と中五十沢の二つあり、行政的にはそれぞれ村山市五十沢地区、尾花沢市五十沢地区となる。本論文では集落を研究対象とするため、村山市上五十沢集落という呼称を用いた。
- 2) 温井亨（1997）：五十沢地区景観活用整備調査報告書：村山市
- 3) 温井亨（1998）：五十沢出身者アンケート報

- 4) 告書：五十沢かやぶきの里景観会議
- 4) 村山市（1996）：村山市史／地理・生活文化編、77-102pp
- 5) 山形地方気象台（1987～1998）：山形県気象月報。過去10年間の最深積雪量の平均は以下のように計算できる。山形市（中心部）44cm、東根市（山形空港）49cm、村山市（楯岡）62cm、尾花沢市（中心部）110cm。上五十沢については、文献上記4）の1987

- 年の最深積雪量250cmという記録があるが測定方法に疑問がある。4）5）に共通するのは上五十沢・尾花沢は山形・東根の倍以上の積雪量があることである。
- 6) 上五十沢集落では、納屋等の付属屋をコヤと呼ぶ。
- 7) 民家の構造で使われる上屋に対する下屋の意味ではなく、一般的用語法による、別屋根で庇状に付け足した部分という意味で使う。

Summary : The aim of this study is to seek how to conserve and how to succeed to the historic rural landscape which consists of village communities, agricultural lands and woodlands, and which has been maintained by the activities of life and occupation. As the case study I dealt with Kami-Isazawa Village in Murayama City in Yamagata Prefecture and I analysed its transition both from a physical, and a social aspect. The reasons of the conservation are as follows: 1) Little demand for rebuilding the houses because their children left the village. 2) Little influence of extension and conversion works of the houses on the exterior by the use of Geya and Doma. 3) Many families of the children who left the village live within the range of one hour from the village. 4) Devices fitting the times for the conservation of agricultural lands. 5) No tracas after the inhabitants left the village because there are no boundary signs between neighbors and there is not strong insistence on their ownerships for the land. 6) In the village the inhabitants often construct simple engineering works by themselves.